

日本SOD研究会

SOD

J・S・R・O

Japan Super Oxide Dismutase Research Organization

vol.3

巻頭特集

国際がん専門誌

「INTEGRATIVE CANCER THERAPIES」

丹羽療法が認められて論文が掲載されました

対談

丹羽鞠負(耕三)博士

長瀬雅之先生

統合医療のこれから

新しいがん治療の可能性

元フジテレビ報道キャスター 黒岩裕治氏 講演録

「末期がんなのに苦しまずに逝った父」

【特集】病気を寄せ付けない生活習慣術

“健康人 特別インタビュー”

元横浜DeNAベイスターズ1軍内野守備走塁コーチ

白井一幸さん

SOD体験レポート

SOD愛飲者の声



【特集】

放射能とSOD

ペットと丹羽療法

身近な病気とSOD

女性特有の疾患

丹羽療法

日本SOD研究会

SOD

Japan Super Oxide Dismutase Research Organization

J.S.R.O 日本SOD研究会

Japan Super oxide dismutase Research Organization

<http://www.sod-jpn.org>

「末期ガンなのに苦しまずに逝った父」



いのちと向き合う医療に向けて

2011年2月に行われた「統合医療展」。そのセミナー特別講演に登場したのが、元フジテレビのキャスターとしておなじみの黒岩裕治氏。先の統一地方選挙で神奈川県知事に圧倒的な大差で当選しました。セミナーでお話をされた時はまだ知事ではなく、大学院教授として政府の「漢方と鍼灸を活用した新しい日本型医療の創生」という検討会にも参加されていました。そんな黒岩氏が当日話した、先輩アナウンサーの逸見さんの死、父親のガン闘病などから統合医療へと向かった経緯、今後の医療などを紹介します。

逸見さんの死から手術の限界を感じる

我が家の父母は年に数回はぎっくり腰になっていました。私はその体質を受け、20歳代からぎっくり腰でした。もちろん病院に行きました。しかし、何とも西洋医学の病院の無力なことか。こつちが痛いのがまんして体を引きずりながら行っているのに、まず検査に回されて、診断して、結果的には「自宅で寝てください」というだけで放り出されるんですね。こちらは寝ていられないから来ているんですよ。骨接ぎ、鍼灸などいろいろと試しましたが、何が良いのか分からなかったんです。そうしたら、たまたまアメリカのカイロプラクティックの資格を持った先生に出会いました。その先生に会ってから二十数年たちますが、1回もぎっくり腰をしなくなりました。どんな治療かというところ、魔法みたいなもんです。腰を触って、ポンとやるだけなんです。治療の時間は2、3分なんです。以来、何となく腰が来るな、と思ったら、その先生のところに行くようにしています。そんなことから西洋医療は限界があるという思いがずっとあったんです。これが西洋医学の限界を私自身が認識する第一歩でした。

医療のことを取材する中で、現場でいろんな矛盾を感じることがありました。その中で私の衝撃的な体験は、大先輩の逸見政孝さんのことです。逸見さんのことは皆さんも記憶にあるでしょう。「私が侵された病気がなんです」と生の記者会見でお話をされました。当時、私はテレビの報道センターで、その映像を見ていました。

そのあと報道フロアにあいさつにいらして、握手をしたのですが、その時のやせ細った手の弱い感触を忘れられません。と同時に、あんなにか細いのに手術をするとき、驚きました。しかし、執刀医は、当時から、がんにかけてはゴッドハンドといわれていた権威中の権威でした。逸見さんはその先生にすべてを任せました。

そのときの二人のやりとりの記録があります。逸見さんが先生に「この手術をすれば、私のがんは治りますか？」と聞いたんです。すると先生は「それは神のみぞ知る。でも、私は逸見さんが任せると言ってくださったから、今までのすべての知識と経験をそこに集結して、全力を尽くします」と答えました。逸見さんはその言葉にほだされたんです。

ね。世界の権威といわれている先生が自分のために全力を尽くしてくれる。その言葉に思わず「先生、よろしくお願いします。残りの人生は任せます」と。そうして手術は行われました。

手術が終わった直後、フジテレビの当時の幹部とドクターの会食会がありました。私はその様子を後で聞きました。ドクターは得意満面だったそうです。「手術は完全にうまくいきました。きれいにがんの病巣を全部切り取りました。わっはっはー」と高笑いしていたそうです。すさまじい量の病巣を切り取ったそうで、それを聞いていた幹部たちは首をかしげたそうです。そんなに切って大丈夫なのかと。結果的に逸見さんは、その後、一切回復することなく、そのまま亡くなりました。

これが西洋医療の先端にあり、権威といわれた人の処置だったんです。私は何かおかしいんじゃないかと、納得ができませんでした。でも、そのドクターを責める気にはなれませんでした。彼はゴッドハンドと呼ばれ、多くの症例を扱ってきた、信頼の厚いドクターです。何によって成功を取めたか、それは「がんを切ること」でなんです。がんをきれいに切る技術をどんどん磨いて、彼はそれだけの地位を得たわけです。ですから、患部を切ることに人生を賭けていました。がんを切る技術には長けていました。でも、彼は何かを見失っているのではないのでしょうか。彼は逸見

さんの一体何を見ていたのでしょうか。彼は逸見さんのがん細胞しか見ていなかったのでは、という思いが消えませんでした。

がん細胞と向き合うことも大事かもしれない。ですが、人間の命もそこにはあるんですね。がんは切り取った、でも、死にました、というのは正しい医療といえるのでしょうか。私はその頃から、ひらがなで書いた「いのち」の言葉をずっと大事にするようになりました。「いのちに医療は向き合っているのか」について悩みました。病気に向き合っているだけではないのか、と思いましたが、それから「いのちに向き合う医療は何なのか」をずっと探していました。そんな時に私の父親が肝臓がんになりました。2005年のことです。

抗がん剤の副作用で病状が悪化

2005年夏、父親の肝臓に3センチのがん細胞が見つかりました。父は80歳を超えていましたから、手術はできなかつたので、「TAE(肝動脈塞栓療法)」という新しい治療法をやりました。カテーテルを通して、がん細胞の周りに抗がん剤を入れる、最先端の治療法でした。ドクターは「きれいにがん細胞の周りに抗がん剤が入りましたね。うまくいきましたよ」と自信満々に写真を見ながら解説してくれました。家族は喜びました。で、家に帰りました。3ヶ月後、それまで父はずっと元気

でした。家族としてみれば、がんは治ったと思っていました。ところが検査してみると、3センチのがんが6センチに広がっていました。すごく意外でした。しかしドクターはまったく動じることはありませんでした。「あの治療は完治させるものではありません」と。また同じ治療を行いました。ところが今度は、使う抗がん剤の量が倍以上になりました。そうすると抗がん剤の副作用だと思われる痛みで、父親は七転八倒しました。そして一切ものを食べなくなりました。

ものを食べなくなると80歳を超えた父親はあつという間です。父親は病院に入る前は、がんに見えないねえ、と言われるくらい元気でした。ところが、治療を始めて、一切食べなくなつてから、父親はみるみるやせていきました。あつという間の出来事でした。

その病院には中学時代の同級生がいたので聞いてみました。「余命どのくらいかなあ」「2ヶ月くらいじゃないか」。びんびんして病院に入ったのに、なんで治療しているうちに余命2ヶ月になったのか。信じられませんでした。あつという間に末期がんでした。どうしてと思った時に、私にある一つの出会いがありました。

父親のいのちを救う漢方との出会い

実際に追い込まれた時に「末期がんに対して西洋医学は有効か」というシ

ンボジウムの司会の仕事が入りました。それは「そもそも西洋医学とは何でしょうか」というところから話が始まりました。西洋医学の素晴らしい効果によつて長寿化が実現されました。では、西洋医学とはそもそも何なのか。それは、悪いものを叩き切る、病気を攻撃するものなんですね。がん細胞は悪い細胞、だからこれを手術で取り去る、放射線で叩く、抗がん剤で叩く、いずれも攻撃的な治療です。そうすると、この攻撃にはすごい副作用が伴います。若くて早期発見の人はその副作用に耐える力があります。だから、胃がんの早期発見、早期手術なんというところ、あと何十年も生きていますよね。ところが老人は、再発しましたという、副作用に耐えられずに死に至るんですね。

ここで西洋医学以外のもの、例えば漢方を融合させるとどうなるのか。では「漢方とはなんだ」というと、「気・血・水」のバランスを取ることがとても大事なもののなんです。病気というのは「気・血・水」のバランスが崩れている状態を言います。「気」とは、元氣、勇氣、氣合、氣力、があることです。気の流れ、血の流れ、水の流れ、このバランスが崩れていると病気になるんです。治療によつてそれを取り戻します。その手段は、「食同源」です。食には力があります。人間は全体のバランスの力を食から得ているんですよ。西洋医学的に言う

と、自己免疫力を高めることです。

私はそのシンポジウムを仕切りながら、自分の父親を考えていました。それを教えてくれた先生が、劉影（リウウイン）先生です。女医さんです。中国の中医師の資格を持っています。そしてアメリカに渡ったあと日本に来て20年以上いる先生です。順天堂大学にいて、西洋医学の先生でもあるんですが、今は東京大学の食の安全センターの特任教授をされています。僕は父親のことを相談しました。

先生は未病研究センターをやっているとして、未病の専門家で、末期がんの治療の専門家ではありません。「がんの治療は、理念としてはあるが、直接診断できるかはやったことがないので自信がないけれど」とおっしゃったんです。僕があまりにも切実にお願いするので、診ていただけることになったのです。

人間そのものを診る中医師の診断法

その時劉影先生の前にあらわれた父親はヨボヨボになっていました。その父親に対しての診断は、それは見たことのないものでした。何が違うのかというと、人間そのものを徹底的に診るんですね。西洋医学の病院で先生はそんなに診てくれません。病院で先生はコンピュータばかり見ていて、こっちを見てくれませんよね。検査、検査、検査、検査データの結果ばかり、コンピュータば

かり見ている。劉影先生は違いました。漢方の「四診」をしてくれました。「望診」眺める、「接診」手をあてる、「脈診」脈をとる、脈診とは西洋医学では脈の数を数えるだけです。漢方ではいろいろなことがわかります。

劉影先生は「私はあまり脈診は得意じゃないんですよ」と言うんですが、得意じゃないという劉影先生ですら脈診で妊娠しているかどうか分かります。つまり五感を使って患者さんの体の中の動きを感じ取る、そういうのが中国漢方の診断法です。それだけ徹底的に人間そのものを診ると、いろんなことを発見してくれます。

父親の手のひらの甲が赤黒くなっていました。これは於血（おけつ）の相でした。

於血というのは血の流れが滞っている状態です。あと、父の足のくるぶしが、やけどのように赤くなっていました。これは、肝臓が悪い証拠です。あと、耳たぶに深いシワが縦にすーっとありました。劉影先生に「これはいつからありますか」と聞かれても、家族も分からない、ドクターも分からない、ナースも分からない。そう言われてみれば、以前はここにこんな深いシワはなかった。

「いつからですか？これは気が落ちていた証拠です。気が落ちていたということはどういうことかという、衰弱しているということ。目の前のお父さんはポンッと亡くなってもおかしく

ない状態です」と言うのです。そして劉影先生は「治療をしましょう」と言うてくれました。

長芋生活が父の気を高める

父は自宅に戻りました。そして始まった劉影先生の治療。まずは「長芋を蒸して食べなさい」と言ったんです。私が「長芋を食べてがんは治るんですか」「どういう効果があるんですか」と聞いたら、長芋は蒸して熱を加えると効果があるんですね。漢方には「有胃氣即生」胃に気があればすなわち生きられる、胃に気がある」とはどういうことかという、食べられることです。食べる力があるということはとても大事なことですよ、というのが漢方の考え方。胃に気を送るために、長芋を蒸して毎食食べてくださいと言われてました。同時に劉影先生の処方してくれた漢方薬を飲むようになりました。冬虫夏草が入ったドリンクを使いました。

とにかく、長芋、長芋、長芋の生活が始まりました。まあ試してみようとなりますよね。長芋を蒸して食べても副作用はないでしょうから。大きさは大体6センチくらい、6分間レンジでチンして食べさせました。味付けは何でも良かったんですね。バターでもマヨネーズでも。けっこうおいしいものなんです。何で長芋にはそんな力があるのかというと、長芋というのは、長い、ま

くれと。ところが、理解できないくせに、余計なことを言うんです。「がんが治った」と言ううちの父親に向かって、はっきり言いました。「お父さんのがんは治っていませんから。治っているどころか、お父さんの肝臓がんは風船みたいに膨らんでいます。ある日どーんと爆発したらすぐ死にますから、気を付けてくださいよ」と。気を付けてくれて、どうやって気を付けるんだ。それを聞いてうちの父親はびくびくしました。夜眠れなくなりました。夜中、ベッドの上で泣いていました。

劉影先生も「何でそんなバカなことを言う必要があるんですか。お父さん元氣だったじゃないですか。それで良いじゃないですか。それを目指したんですよ。がんを叩き潰すことを目指したんじゃないでしょ。がんは放っておいていいじゃない。そうじゃなくて、QOL、元氣な状態をどうやって続けるかを目標していたんですよ。そうやってたじゃない。肝臓がんの数値が上がっていたのに元氣だったじゃない。それは、お父さんの気が高まったからです。なぜ高まったかという、うちに帰ってきて、おいしいものを食べて、好きな酒を飲んで、朗らかに家族と過ごしていたからですよ。その時、気は高まっているんです」という話をされて仕切り直します。

劉影先生は漢方の専門家でもありますが、西洋医学の専門家でもあります。あまりにも数値が上がり過ぎてい

これはまずいとお思いになったんでしょ。ね。中国の漢方の肝臓がんの専門家の先生と連絡を取り合ってくれました。結果、漢方の抗がん剤を使おうとなりました。漢方薬というのは、みなさん誤解しているところがありますね。漢方薬は副作用がない、即効性はない、と勝手に思っている人がいます。これは全部うそです。漢方薬にも副作用があるものはあるし、すぐに効くものもあります。漢方の抗がん剤、これを使いました。で、あとは長芋長芋長芋の生活ですね。

6ヶ月後、検査しました。12センチの肝臓がんが、3センチになりました。5200の腫瘍マーカーが20になりました。20といったら正常値です。西洋医学の先生に言われました。「お父さんの肝臓がんはなぜか完治しました」そう言われて、父は本当にびっくりしていました。「3センチでもがん細胞を気にすることはありません」

ところが、父がある日、転んでしまったんです。圧迫骨折をして立てなくなりました。動けなくなると気がだんだん、落ちていきます。最後、早朝に「胃が痛い」「どうしたの」というとポンッと亡くなりました。前の日までステーキ食べていました。まさにピンピンコロリで逝ってくれたんですね。

余命1ヶ月と言われてから、とっても生活の質が良い、家族に包まれた2年半を過ごすことができました。貴重

な、貴重な2年半でした。うちの母親は父親がこんなに長く生きるとは思わなかったと言っていました。こういうことが実現できる、これこそが私が求めていた「いのちと向き合う医療」でした。これを何とか広めたい、それはおそらく、父から与えられた宿題だろう、それは私の使命、ミッションだと思います。その思いを本に書きました。「末期ガンなのにステーキを食べ、苦しまずに逝った父」を一昨年の9月に出しました。

古くからの伝統医療の見直しを

漢方というのは、生活の中の養生美学なんです。われわれは具合が悪くなると、すぐ薬局で薬を買ったり、病院に行ったりします。でも江戸時代はどうだったんですか？そんな病院はなかったでしょ。ドクターは漢方の先生だったでしょ。みんな生活の中で防衛してたんなんです。生活の中で医食同源が全部あったんですよ。中国からやって来た漢方の元祖はすーっと根付いて伝統医学としてあったんですよ。

ところが明治になって、明治政府はかつての伝統医療に権利を与えなかった。医師国家資格というのは西洋医学にしか与えなかった。それが日本の近代化なんです。伝統を捨ててしまったんです。細々と漢方が生きながらえて残っているだけなんです。中国も韓国も、西洋医学が後からやって来た。日

つすぐ地面に、垂直にダートと伸びていくあの力です。その力を得るためです。そしたら、だんだん父親に食欲が出てきました。食欲が出てきたら、どんなに食べるようになりました。ステーキを食べ始めました。ビールを飲み始めました。そうするとどんどん太ってききました。最初のうちは寝ていたのに、起き上がるようになりました。父親は「俺は治った」とまで言いました。本当に治ったように見えました。で、検査しました。そしたら、検査データでびっくりしました。6センチだった肝臓がんが12センチになりました。40が正常値の腫瘍マーカーが、5200でした。5200という、大変な数値です。西洋医学の権威の先生に聞いたら「腫瘍マーカーが5200で生きている人はいませんから」と言うんです。生きていませんよと言ったって、うちの父親はびんびんして、ステーキ食ったり、ビール飲んでたりしているんです。そんなことあり得ないというんです。あり得ないと言ったって、うちの父親は元氣で、太ったんですよ、と言うと、それは太ったんじゃない、むくんだんだって言うんです。これが西洋医学の限界なんです。データ優先主義の教育を受けたドクターには腫瘍マーカー5200、（がん細胞が）12センチといった時に、父親が生きているというこの現実が、理解できないんです。理解できなければ、むしろ「分かりません」と言って放つとい

本と同じことが起こりました。でも対応が違い、伝統医学は残ったんです。ですから中国、韓国では医師の国家資格は西洋医学と漢方の二つあります。それを今どうやって融合させていくかということを考えている、そういう時代なんです。一方、日本は漢方を捨ててしまった。結果、今、西洋医学の限界まで来ているんです。江戸時代、西洋医学になる前の時代にあったいろんな知恵を私たちは忘れていませんか？それは、おばあちゃんの知恵袋みたいなものです。旬の物を食べなさい、精を付けなさい、こういう言葉は、全部、そういつた歴史から来たものでしょう。食の中から改善する、これができることが日本にとって一番良いことでしょう。

末期ガンなのにステーキを食べ、苦しまずに逝った父

黒岩祐治（くろいわゆうじ）

フジテレビ政治部、社会部記者からニュース番組等のキャスターとして活躍。「救急医療キャンペーン」では救急救命士誕生に結びつく法改正まで踏みこみ、数度の民間放送連盟賞を受賞。09年に同社を退職し、国際医療福祉大学大学院教授に転身。11年4月神奈川県知事に就任。著書に「メッセージ力を高める黒岩の法則」（飛鳥新社）「末期ガンなのにステーキを食べ、苦しまずに逝った父」（講談社）。

黒岩祐治 著 講談社

